

大嶮商舎の出発と速水堅曹

発表者：速水会員

原合名会社が富岡製糸場と共に三井から譲り受けた4つの製糸場のうちのひとつ「大嶮商舎」については、これまで研究会でも取り上げることがなく、知られていなかった。私は自身が研究している速水堅曹の関わりから2010年に大嶮商舎の創業者・川村迂叟のご子孫と知り合うことができ、調査をすすめてきた。川村家は江戸の勘定所御用達十人衆の一人という豪商で、幕末に大名から賜った鬼怒川沿いの広大な荒蕪地で明治2年から養蚕製糸業をはじめた。宇都宮の石井村大島河原という地であったことから「大嶮商舎」と名付けられ、「石井製糸所」ともいわれた。明治4年に工女らが日本で最初の器械製糸所をつくった速水堅曹のもとに伝習に行き、明治7年にイタリア式の大きな器械製糸所をつくった。

海外の博覧会で賞を得るなど、高い品質の生糸を生産してその名はひろく知られた。明治12年にアメリカのグランド将軍が訪れたことはその証左で、その時午餐を饗応した場所が、明治35年に原合名会社の所有になってから三溪園に移築された「待春軒」である。他に大石内蔵助ゆかりの茶室「寒月庵」と明治18年に亡くなった迂叟を祀っていた神宮「皇大神宮」が三溪園に移された。この3つの建物が、三溪が古建築を移築するはじめであることを考えると、いかに川村家の文化度が高かったかがわかる。

大嶮商舎は大正4年に閉鎖され、ほとんどの器械や建物は富岡製糸場に移されたといわれている。しかし現在確認できる建物は一つだけである。

会員には宇都宮の現地の様子などもみていただいた。看板一つなく、製糸所の跡を確認するものは残っていないが、富岡と同じ規模の立派な製糸場があったことを少しずつでも広めていきたいとおもう。（速水）



メッセージカード分析集計



メッセージを読んで分析します

5月に三溪園でクイズを実施した際に、来場者のみなさまから三溪さんや三溪園について思うことをカードに記入してもらいました。今回は、そのメッセージを分類して並べ直してみました。会員が3班に分かれ、各班とも模造紙1枚分のメッセージカードを、回答者の男女別や、書かれた内容ごとに分けて新しい模造紙に貼り直していきます。メッセージカードは全部で模造紙10枚分ありますので、分析作業はまだまだ続きます。